



AUTO PORTRAIT  
(À L'ÉTRANGER)

Jean-Philippe Toussaint

ジャン=フィリップ  
トゥーサン

野崎 歓・訳

# セルフ ポ<sup>。</sup>ートレート



異国にて



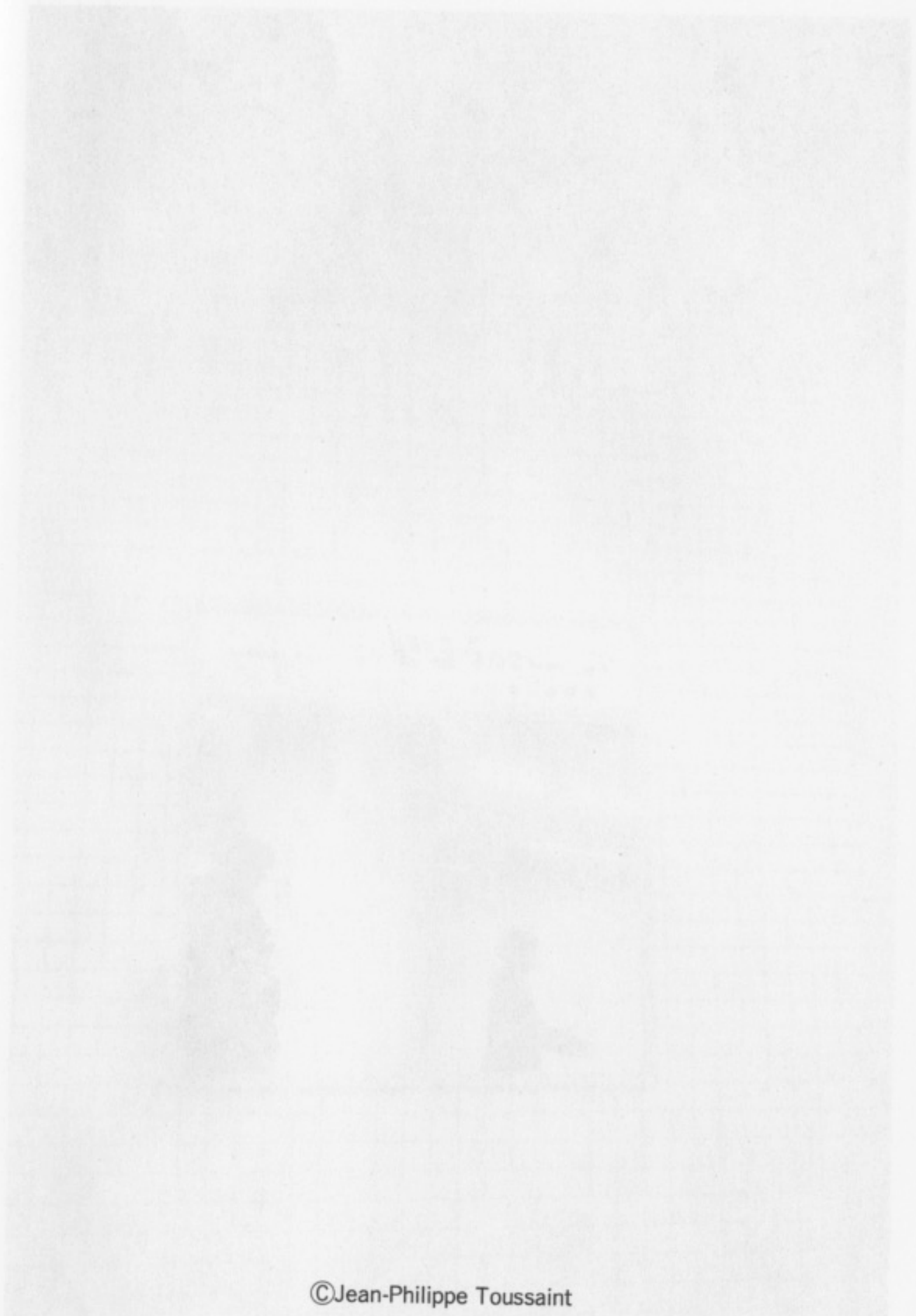
ゲームのトシリ  
TEL 231-8324



セルフポートレート(異国にて) 目次

1. 序言  
2. 第一章  
3. 第二章  
4. 第三章  
5. 第四章  
6. 第五章  
7. 第六章  
8. 第七章  
9. 第八章  
10. 第九章  
11. 第十章  
12. 終章

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



東京、第一印象

香港

ベルリン

プラハ

コルシカ岬（わが生涯最良の日）

東京

京都

奈良、日本の古都

ヴェトナム

チュニジア

京都に戻る

旅するトゥーサン——訳者あとがき

117 110 92 73 60 53 44 28 23 18 13 7

セルフポートレート（異国にて）

旅立つときはいつだって、出発の際ごくかすかな苦悩に胸を締めつけられるのだが、その苦悩はときに甘美な興奮の震えを伴うこともある。というのも旅には死——あるいはセックス——の可能性がつきものだとかわっているからだ（もちろんいずれの可能性もごく低いには違いないが、とはいえ完全に除外して考えるわけにもいかない）。

## 東京、第一印象

東京に着くのもバスチアに着くのも同じこと、空から下りていくのであって、飛行機は湾上でゆっくりと旋回を始め、滑走路の方向を見定めると着陸態勢に入る。四千メートル上空から見下ろしたとき、太平洋と地中海のあいだに大した違いはない。

それにクリスチャン・ピエトラントーニ、これはマドレーヌのコルシカ人の友人なのだ——この本ではマドレーヌをマドレーヌと呼ぶことにする、そう

すればほくも話に加われるから——、彼がさっそく登場してきて、東京のカフェで会おう、村の最新ニュースを聞かせてやるからと言うのだった。ぼくが東京に到着した翌日にはもう、旅荷を解く暇も与えずにホテルの部屋に電話してきたのだが、そのときこちらは白いシャツに定年退職した小学校の先生が着るような可愛い青いチョッキ（両親からの新年のプレゼント）という姿で、靴下はだしになってベッドの上でスポーツ雑誌をめくりながら、インタビューしに今にもやってくるはずの新聞記者を待っていた。室内の少し離れたところ、丸いテーブルに向かって腰を下ろしているのは集英社のムッシュ・ヒロタニで、氏はぼくの到着以来マダム・フナビキと交替で、付添い役に相談役、ガイドにボディガードを務めてくれていたのだが、いま視野の隅に入っている氏はスーツにネクタイをきちんと締め、重々しい表情で一心不乱、ぼくがもらった花束を花瓶に活けるのにかかりきりになっていた。薄紫と白（これはアンデルレ

ヒトのチームカラーだが、ぼくのためにわざわざこの色を選んでくれたものか（どうかはわからない）の花五本を相手に、たえずその並べ方を変えては調和の取れた花束を作り上げようとし、少したつとまたゼロから再出発、忍耐強く丹念に、あそこと思えばまたこちら、花の位置を直すその姿は華道の達人と言うよりもゴダールの映画に出てくるギャングを彷彿とさせた。ひそかに彼の様子をうかがいながら、雑誌のページをほんやりと繰りつつベッドの上で靴下だけの足を組んだりほいたりしていい気分を味わっていたそのとき、室内の電話が鳴った。花束をカーペットの上に残しひとつとびで、ヒロタニ氏は電話機に飛びついた。腕をぼくの体の上に突き出し、ナイトテーブルの上の受話器を掴んで、そっと、礼儀正しくコードをひっぱり、だが厄介なことにコードはぼくの首、肩口に絡みつき、ヒロタニ氏はそれをふりほどこうとしてぼくを一瞬窒息させたあげく、注意深く両手を使って、ぼくの頭越しにコードをたぐり寄せ、

目で謝りながら電話に出た。ぼくは顔を上げ、電話の相手は誰なのか、ホテルのレセプションかそれとも出版社の誰かか、きつともうすぐ来るはずの読売新聞の記者かもしれないと考えた。ぼくの傍らに立ったヒロタニ氏は深刻な表情で聴き、機械的にネクタイを結び直した。イ、エ、ス、と彼は言った。イ、エ、ス。イ、ツ、フ、ホ、ー、ユ、ー、そうやって受話器をこちらに差し出した。クリスチャン・ピエトラントーニだった。

翌々日クリスチャン・ピエトラントーニと会うことになったのだが、夜、六本木の南米風バーで会うのに失敗した後、彼は朝、ホテルまで会いにきた。上着を脱いで、ぼくらは島国の陽光の下二人並んで東京の街を歩き、とあるモダンな、味気なく個性もないカフェに入った。パステイスを一杯やる時間だったが、ぼくらは緑茶を飲むにとどめ、箸の音と日本語の響きが混じり合う中、ま

わりのテーブルで若い娘たちが食事しているのを尻目に、ぼくの前に座ったクリスチャン・ピエトラントーニは店内の雰囲気など意にも介さず、村の最新ニュースを披露してくれるのだった。ノノやネネット、アルベルチーニ一家やアントマルキ一家などなどについて、一体どこからこれほどのニュースを仕入れてくるものやら（ひよっとしたらアジア諸国に特派員でもいるのか？）。ホテルまで送ってくれる道すがら、おそらくは謎を解く鍵を与えてくれようとしてのことか、彼は自分が「コルシカ日報」を定期購読していることを打ち明け、別れ際、また近々会おう、エルサか東京、ロンドンかマシナッジオでと言って、ホテルの入口前で西洋式に力強く握手したのだった。

日本ではぼくの手に変化が起こった。まず第一に、泊まっているホテルと関係があることなのか、使われている建材の性質、たとえばドアのノブがたいが

い木製ではなく金属製であることに関係しているのか、それともぼくの経験し  
たちよつとした不快の原因はむしろ着ていたウールのチョッキ（両親からの新  
年のプレゼント）に求めるべきものなのか、それはわからないが、いずれにせ  
よドアのノブを掴もうとしたりエレベーターのボタンを押そうとするたびごと  
に静電気の一撃を食らうのだった。ともあれ、打ち明け話はもうたくさん。

## 香港

地表からせいぜい十数メートル、冗談のような高度で街の上空を飛行し香港<sup>ホンコン</sup>  
に着陸したのはせいぜい数分前のこと、ボーイング機の巨体は滑走路に襲いか  
かる際、ビルディングのてっぺんをかすめ、商店街をぎりぎりのところで振り  
切ったのだが、巨大な飛行機が自分たちの頭上を通過していくのはさぞ途方も  
ない光景だろうに、白いシャツを着て口にタバコをくわえた人々はそれに少し  
も気を取られることなく道を渡っていき、あるいは自分の家の門口に腕組みを  
して佇<sup>たたず</sup>み、活気あふれる香港の街、色とりどりの漢字が夜の中で無数に明滅す



る香港の街で涼を取っているのだった。その少し前、飛行機がまだ上空はるか高くにあってゆっくりと旋回し降下を開始したそのとき、飛行機の円窓越しに香港の湾全体が青と白の光の点滅のうちに出現したのであり、彼方にはマカオか九龍<sup>カオロン</sup>か、都市部らしきものの光が青みを帯びた山並みを背に浮かび上がったのだが、その輪郭は夜の闇に沈んで影としか見えず、一方ぼくらの真下の海面では、客船や平底船、貨物船、コンテナ船、さらには海上カジノや、人々が点々と花のついたツタ飾りの下でサルサやマンボ<sup>マンボ</sup>を踊るダンスホールなどが影となって浮かび上がる合間に、何千もの個人用ジャンク船が、湾の黒い水にホタルのように光の点をうがちながら揺れていた。

香港<sup>カイタク</sup>啓徳空港の広大な待合室に置かれたプラスチック製のどこといって特徴のない椅子に腰かけて、両手を組み合わせ、前かがみになり、開いた両足の

あいだから汚れたりノリウムの床をじっと見つめながら、ぼくはいささか途方に暮れ、方角を見失った気分でした（五時間前に大阪を出発し、これからフランクフルトに向かう途中で、フランクフルト到着は十二時間後の予定）。自分がどこにいるのかわからず、これからどこへ向かおうとしているのかも、もはや本当にはわからなかった。一瞬時空の座標軸を失う同じような感覚を、数日前、日本へ向かう飛行機の中ですでに味わっていたのだが、それは座席でうとうとしながらも円窓の向こうに目をやって、突然、外が昼でも夜でもなく、まさしく同時に昼であり夜であると気づいたときのこと、機体の右手、翼の延長線上には空に皓々と輝く月が見え、一方飛行機の進行方向には彼方にぼんやりした太陽が、今のところはロスコ<sup>ロシア生まれのアメリカの画家</sup>の綿雲のような描線にも似た、オレンジ色を帯びたバラ色のおぼろな光として見え、それが昼と夜、ヨーロッパとアジアに画然と隔てられた広大な空を染めていた。しかしながらボーイン

グ747の静まり返った機内は完全に夜のしるしの下に置かれていて、飛行機は鈍いエンジン音を延々と立てながら大気中を不動のまま東京めざして飛び続け、腕時計をのぞきこむと深夜一時、他の乗客たちは薄暗がりの中で眠っており、円窓につけられたプラスチック製の覆いはきっちりと下ろされていて、飛行機に乗ってすでに六、七時間は経過したこの時点での疲労もあり、まぶたは重くなって自然と閉じてしまう。そうした一切のことが、今が夜であるとはつきり告げているかのようだった——ただ一つのささいな、しかし重大な点を除いて。つまり、外は昼間だったのである。

今では腕時計は大体夜の十一時を示していたが、それはもはや、これから向かうベルリンでも、今まだ留まっている香港でも通用しない日本時間なのだった。そう、というのもぼくは香港にいたのである。何なら小説の中にいたと言

ってもよかっただろう。とはいえ、真実らしさはもうたくさん。

## ベルリン

ベルリンの人はつつけんどんで気が短く、無愛想という評判がある。たとえば何かの店に入るときには、まず靴の底をよくぬぐったのち、買い物があったらだなんてまことに恐縮ですがといった低姿勢を示さなければならぬという。ドイツ語がほくらいへたで、しかもひどく訛っている場合（訛りの問題はまったく相対的なものだとしても）、一般に人は冷たくあしらわれるし、そこへもってきて買い物をしたくないなどという厚かましさに、相手の言ったことを繰り返させるという無謀さを加えるならば——ただし「ヴィー・ピッテ？」という

## ベルリン

その問い返しはまったく非の打ち所のないドイツ語ではあるのだが——、その人物はひとときわすげなく扱われることだろう、何しろそれでは相手の発音に疑問を呈するも同然で、とはいえ相手の質問は、まあご判断いただきたいが、このとおりやはり非の打ち所のないドイツ語でなされていたのだから——「ヴ、イ、イ、ドイツク、ドイツ、シャイベ？ 普通のを、とぼくは言った。普通の厚さを。若い女性は、というのも店員は若い女性、意地悪な太った若い女性だったのだが、彼女はぼくをうさんくさげに見た。ハムを一切れ切ると、それをカウターのの上に放り投げた。ハッホ・アイネン・ヴンシユ？ ダス、とぼくは言つてアスピック〔肉・魚をゼリーで固めた冷製詰物料理〕を指さした。店員はさっさとアスピックを切つたが、しかしそれは薄い、あまりに薄っぺらい一切れで、こんなに薄くではパスポートのビニールカバーか、メガネ拭きに使えるそうなくらいだった。ドイツ、とぼくは言った。これぞまさに勝負の分かれ目、ぼくはその一言

をぶつきらばうに言い放ち、直ちに、ひるむことなく、相手の目を凄みをきかせてはっしと睨みつけ、今や二つに一つ、店員がぼくを放り出すか、つまりぼくをののしり、どのくらいの厚さに切ってほしいのかお前はちゃんと一言わなかつたのだからこっちは極薄が望みなのだと考える権利があったのだと言って店から叩き出すか（これをドイツ語でまくし立てられたなら言い返すのは難しかっただろう）、それともぼくの言うことをきいて望みどおりにアスピックを切ってくれるかだ。店員はぼくの言葉に従った。極薄のやつは脇にのけて、ひよつとしたらそれは後で自分で食べるつもりなのか、丸めてそつと呑み込むのか、ともかく店員はウィンドーからアスピックを丸ごと取り出した。その上にナイフを乗せて目でぼくに問いかける。こんな感じ？ と店員が言った。もつと厚く、とぼく。店員はナイフを右に寄せた。このくらい？ と店員。もう少しだけ薄く、とぼく。店員は目を上げてぼくを見たが、もはや抵抗する力はな

く、すっかりこちらの手中にあった。ふたたび右にナイフを寄せた。だめだめ、そんなに厚くしないで！ とぼくは言った。店員はナイフを左に寄せ、今や一切はスピードを増し、加速する一方で、店員はナイフを少し左に寄せ、少し右に寄せ、少し左、少し右、なかなかうまくいかず、ぼくは首を縦に振らない。残念、さっきの位置でよかったのにとぼくは言った。最初からもう一度。店員は手を止め、アスピックからナイフを持ち上げた。汗びっしりで、玉の汗がアスピックに落ちていく。リラックスして、とぼくは言った。緊張しすぎですよ。さあ、元気を出してもう一度。こんな感じ？ と店員。完璧、とぼく。ね、その気になりさえすれば。そう言って彼女のほっぺたを撫でてやりかねないところだった。彼女はアスピックをうやうやしく包み、心からの敬意を込めておつりを返し、ぼくのためにさらに何をしたらいいのか、何を申し出よう、どんな心づくしを示そうか、ビニール袋をお使いください、アペリチフなどいかが、